



ワイエスのアトリエ内部（2014年9月高橋撮影）

アンドリュー・ワイエスの制作地

—— ペンシルヴェニアの場合

愛知県美術館 高 橋 秀 治

アンドリュー・ワイエスはこれまでも知られているように、描いた地域が限定的で旅に出て取材するようなことはしない画家であったと言われている。実際のところ、生まれ故郷で自宅のあるペンシルヴェニア、チャッツ・フォードと、父ニューウェル・コンヴァース・ワイエス（以下N.C.）が夏の家を定めた時代から毎夏の避暑地として過ごすメイン州クッシング地域以外へ出掛けて作品制作することはなかった。

それでは、いったいそれぞれの地域の中ではどのような活動範囲で制作をしていたのだろうか。

今回はペンシルヴェニア、チャッツ・フォードでの制作地を実地調査し、その行動範囲を確認するとともに、彼の制作に向かう視点のあり方や、内面の動きも考察したい。

ペンシルヴェニア州、チャッツ・フォードは、都市部とは異なりその風景や建物などは第二次大戦後から大きくは変貌していない。何より、アメリカの歴史にとって非常に重要な独立戦争の戦場であったことはよりその傾向を強くさせている。したがって70年ほどのワイエスの制作活動を地理的な視点から後付けしようとするとき比較的容易に描かれた場所を特定することができるのである。もちろん道路の拡張であったり、住人の変化によって家を取り壊されたりしていることはあるが、大規模住宅開発や巨大なショッピングモールなどはワイエスが行動範囲としたエリアには無縁であった。それどころか敢えて言えば、場所によってはワイエスが描いたことによって、保存されている建物さえあるのである。

そのひとつが、カーナー農場とその家屋と納屋などを含むカーナー家である。よく知られているように、ワイエスの代表作として紹介されることの多い《クリスティーナの世界》（1948年）をはじめとする一連の作品がカナダ国境近くのメイン州クッシングにあるオルソン家を舞台に描かれたと同様に、長年に亘ってペンシルヴェニアにおいて中心的画題となったひとつがカーナー家であった。そして、ワイエスによって描かれたことにより保存されているメイン州のオルソン・ハウスと同様に保存されている。現在はブランディワイン・リヴァー美術館の管理となっており、ワイエスの生家や父N.C.のアトリエとともに美術館からのミニツアーで訪れること

ができ、内部も含めてボランティアのガイドで見ることができるようになっている。

ワイエスがカール・カーナーに出会い、本格的に交友を持ち始めたのは13歳の頃であったという。今回、制作現場を確認した作品のなかで最も早い時期のものは1933年であり、作者の年齢でいえば16歳時で、ワイエスにとっては珍しい油彩画であった。これはテンペラ技法を義兄のピーター・ハードから学ぶ以前の作品で、〈カーナー・シリーズ〉の始まりを告げる作品と言ってもよいだろう。10代の半ばからシリーズは歩みを始めたのである。しかし、〈カーナー・シリーズ〉のなかでも重要な作品が描かれるのは、父N.C.がその孫（ワイエスの兄ナサニエルの息子）と一緒に乗った車でカーナー農場近くの踏切事故にあって亡くなった1945年前後からで、カール・カーナーが亡くなる1979年あたりまでである。そこには常に父N.C.を生前に乗り越えられなかったというある種の悔恨と追慕がないまぜになり、父性の象徴としてのカールとその周辺を描き続けたのである。それはカール・カーナーを直接描いた《カール》(No.3.)に限らず、カーナーズ・ヒルと呼ばれる丘を駆け下りる少年を描いた《1946年冬》(No.2.)や「カーナー家の肖像」とワイエス自身が言う《ブラウン・スイス》(No.4.)のような風景画にもあてはまる。

ここでこのカーナー農場を含め生家やワイエスの住居、アトリエなどの地理的位置関係を確認しておこう。カーナー家の母屋や納屋を中心とした一帯はワイエスが描き続けた場所であり、生家からは東方向へカーナーズ・ヒルを越えればすぐ眼下に広がっている。直線距離にすれば半マイルにも満たず、隣といえ言えなくもない。少年時代から近隣を歩き回っていたワイエスにとっては、まさに隣の家といったところである。

国道1号線（北はメイン州カナダ国境沿いから南はフロリダ半島最南端のキウエストまで、アメリカ東海岸を走る古い道）から南方向へのびるリング・ロードと呼ばれる道がカーナーズ・ヒルとカーナー農場の間を走っている。

また、生家から北北西方向に半マイルほどにはワイエス家三代の画家を中心とした展示で広く知られるブランディワイン・リヴァー美術館がある。現在、美術館となっている建物は、もとはといえばブランディワイン川の水を利用するために川沿いに建てられた製粉工場だったものを改築して美術館としたもので、美術館のトレードマークも石臼をデザイン処理したものである。この美術館はブランディワイン川流域を中心に自然や文化資源を守ることを目的として設立された「ブランディワイン管理委員会」の中心的な文化施設である。この美術館にはワイエス家のコレクションを収蔵・管理する事務所も入っている。日本の美術館からすると理解しにくい、おなじ展示施設の中に美術館のコレクションや企画展を展示するスペースとワイエス家の作品を展示する施設が同居しており、連携しながらも異なる施設と

してどちらにも学芸員が勤務している。したがって同じ美術館で見られるワイエスの作品にも美術館所蔵のものとワイエス家所蔵のものがあるのである。

さらにこの美術館から北西に1マイルほどのところに、ワイエスが長年に亘って描き続けてきた現在のワイエス家の住居がある。1号線からクリーク・ロードを北西に進み、プリントンズ・ブリッジ・ロードと交わったあたり一帯がワイエス家の地所である。広い牧草地の端のブランディワイン川の水路沿いに建つ建物は古い歴史を有している。

「プリントンズ・ミル」と呼ばれる粉ひき小屋は、現在は粉ひきには使用されておらず、ワイエス家の住まいの一部となっている。ただしここだけがワイエス家の建物ではない。近くには1990年にテンペラ《ドアベル》の描かれた、古い学校の建物を移築し夫人が使っている家のほか使用人が事務所としている家、また、ブランディワイン・リヴァー美術館を南に下ったところにあるワイエスがアトリエとして使っていた家などがある。それらのなかでも中心的な建物がこの粉ひき小屋を中心とした建物群である。ここは非常に古い建物で、建設されたのは1704年、その後1762年に改築拡張されており、アメリカ独立戦争の戦闘の舞台としても知られている。1777年9月11日、イギリス軍に雇われたクニップハウゼン將軍率いるドイツ人傭兵部隊がブランディワイン川を越え、この粉ひき小屋に集結したアメリカ軍と激突。激しい砲撃戦が繰り広げられたあげく、アメリカ軍は粉ひき小屋を撤退し、大敗を喫した。「ブランディワインの戦い」として有名な戦闘である。その後1958年に売りに出されていた粉ひき小屋をワイエスの妻ベッツイが買い取った。当時は水車小屋、穀物倉、粉ひき職人の家、サイロの4棟の建物が建っていたが、彼女は大幅な改修工事を行った。粉ひき職人の家と穀物倉を外壁だけ残して内部を改造、さらに粉ひき職人の家に木造棟をつぎたして拡張し、車庫を増築して一家の住居としたのである。工事は1963年に完了したが、その後は数年に一度大雨によって水路から水が溢れ、建物まで水につかってしまう被害があるというが、そのたびに修復され周りの景観も含めてよく保たれている。

ペンシルヴェニアでの彼の制作活動の範囲を地図上で確認してみると明らかなのは、飽きることなく同じ場所を繰り返し描いていることである。それは自分がよく知っている場所であるとともに常に新しいものを発見しているところでもある。現在のブランディワイン・リヴァー美術館を中心に半径1マイルの円内にペンシルヴェニアでの主要な題材となった場所がほぼ収まってしまう。それは彼が自身の足で歩き回れる範囲なのである。

ところで、19世紀アメリカのロマン主義思想の超絶主義への親和性がワイエスには強く認められる。ロマン主義的傾向は父N.C.からも引き継いだものであるが、ワ

イエス自身が子供のころから空想世界に遊ぶことで自分自身を確かめていたことと深くつながっていると言ってもよい。集団生活になじめずほとんど学校生活を送ることのできなかった虚弱な少年、アンドリュー・ワイエスは、家長として、画家の先達としての父のテリトリーから離れ、ひとり自宅の近隣を歩き回ることによって自分自身の世界を作り上げていった。少年アンドリューは自宅近くをひとり歩き回る中で父親が示す世界とは異なる自分自身の居場所をみつけていったのである。たとえば、『冬のトゥモロコシ畑』（1942）という作品について彼は、「子供のころ、他の子供たちは学校へ行っていたが、私はトゥモロコシ畑や森を歩き回ることによって教えられたのだ」と述べている。また他ではトゥモロコシの木の並んだ畑を通るとき、自分は兵隊を閲兵する将軍の気分になっていたとも語っている。

ワイエスが少年時代からつくり上げてきた内面世界では、超絶主義にある人間の内面の神聖さや自然との交流の中で、直感による心理の把握といったものと結びついている。超絶主義の重要な人物であるヘンリー・デイビッド・ソローの日記や著作の中にもワイエスの生き方、制作方法にも共通する点が多く認められる。

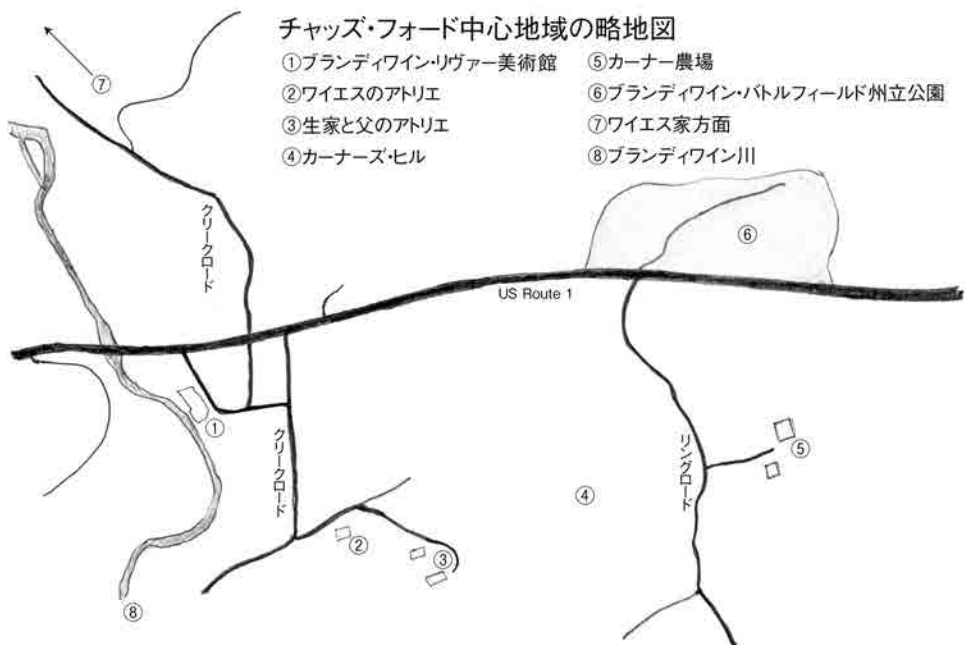
ソローにとって「歩く」こと、逍遙することは、なによりもまず、自分自身を既存の社会秩序から自立させるための独自の特別な方法であった。それと同じように少年アンドリューも歩くことで、父のくびきから無意識に自由になろうとしたのだった。

ソローは、「歩く」ことをたんなる足の運動としてとらえるのではなく、「歩く」ことに捧げられるべき高次の内的意思によって、その行為が未知の哲学的領域を形成することを確信していた。「歩く」ことは空間の移動であることを超えて、認識の大きな飛躍をもたらす身体知の技術といえるものであった。外界としての自然に向かって歩き出すことは、同時に自らの内に向けて意識の世界を拡大して行くことでもあった。ソローにとっての至高の「旅」は決して大仰な旅行ではなく、ごく身近な近隣を「歩く」ことだった。その小さな空間の奥行きが同時に人間の人生そのものの内実と重なっているという直観を、ソローはこう示唆的に述べている。

「私は牧場の緑を眺め、木々の間に見え隠れする流れに目をやる。強く光を反射し、まばゆい。人びとはごく身近なところで展開されるこのようにみごとで壮大な風景を觀賞する代わりに、キャンパスに描かれたけばけばしくて安っぽい絵を、カネを払って見たいと考えがちだ。あるいは、すばらしい風景を見ずに一生を終えてしまう人だっているかもしれない」（『日記』1853年6月2日）、「風によって水にさざ波が立つときの湖や牧場を見ると、私の心は沸き立つ」（『水によるセラピー』仙名紀訳、2001年、アサヒビール株式会社、p6）、こうした言葉はそのままワイエスの言葉と言われても不思議がないくらいである。

ワイエスもまた最晩年まで家族がまだ寝ている早朝から家を出て近隣を歩き回

り、自らの直感に強く働き掛ける事物を捕らえたとき、彼の言葉によれば「edge (エッジ)」を見つけて、耳の後ろの髪がそばだつように「click (カチッ)」と自分自身にスイッチが入るといふときを求め続けた。そのためにも歩くことで精神を集中させ、自らの世界に入り込み、一見見えたままを描いているようでも自らのイメージを具体的なヴィジョンとして描き出すのである。きっかけは窓の灯りであったり、水の音であったり、そこには人物がいなくても、自分と何かしら交流のあった記憶が底流に表されている。そのために建物のあるべき窓が省略されたり、それほど高くない丘がより大きく描かれたり、窓のガラス越しに見えるものを強調したり、実際には見えない明るさでも水の流れを描いたりしてヴィジョンを完成させている。ある種の物語性が含まれているといってもよいだろう。しかしそれは単に甘い思い出に浸っているわけではない。作品からも観者に媚びるような甘さは感じられないし、対象もいわゆるきれいな風景でも、いかにも絵になる場所でもない。ワイエスは単なる対象の再現描写に長けた風景画家なのではなく、ロマン主義的傾向の強いモノログを展開しつつも、文字通り長い「歩み」の中で画家自身の内面を哲学的領域まで高めることのできた稀有な画家だといえるだろう。



作品と制作地について

2014年9月にペンシルヴェニア州チャッツ・フォードを訪れ、カーナー農場とワイエス家のほか、アンドリュー・ワイエスのアトリエ、生家や父N.C.のアトリエ、

さらに画家と交流のあった友人宅など描かれた現場を訪ね歩き、話を聞いたり写真に収めたりした。そのうち図版ページに取り上げた作品すべてではないが主なものについて解説を付す。番号は図版作品番号を表しており、とくに言及していない作品もあるので、番号が抜けているものもある。

1. これはカーナー農場を描き始めた最も早い時期の作品で、しかもワイエスには珍しい油彩で描かれている。カーナー家の裏手にある現在は牧草地となっている畑と納屋が見えている。遠くにはカーナーズ・ヒルと呼ばれる丘が見え、そこを越えればワイエスの生家が現在もある。
2. 1945年にワイエスの父N.C.が踏切事故で急逝して精神的に大きな衝撃を受けたワイエスは、翌年の春先に飛行帽を被った少年がカーナーズ・ヒルをバランスを崩しながら駆け下りる姿を見たという。その時父なる存在としてのこの丘をおぼつかない足取りで降りる少年に自分自身の心を投影させて、ワイエスの内面に強く印象を残した。
3. カーナー家の住人のように自由に出入りを許されていたワイエスは父N.C.を踏切事故で亡くし余計にカール・カーナーの中に父性を見ていた。カーナー家母屋の3階に当たる屋根裏部屋には肉などをつるすためのフックが天井に今も残っている。
4. カーナー家の肖像とも言うべきこの作品には数多くの下絵が残されている。タイトルの「ブラウン・スイス」は建物右手の牧草地に描こうと考えてデッサンをしたものの結局は描き込まれなかった牛の品種名である。実景と見比べると実際にはある窓を省略していることなどがわかる。一見見えたままを描いているように見えても画家自身の内面の変化や想いを反映してモチーフの簡略化などが行われている。この作品を見るときソローの次の言葉が思い出される。「水面には、永遠とも思われる風景が映し出されている。それは、いわば永遠の理想像だとも言える。牛たちの目には、この光景がどのように映っているのだろうか。見ているのは、ほぼ牛たちだけに違いない。」(『日記』1951年11月9日)
5. カーナー家母屋の一階のキッチンである。切り倒された丸太が覗く窓の外と食器が乗ったテーブルを描いた作品である。当初の下絵では飼い犬のシェパードが描かれたりしていたが、テンペラのこの完成作では、主人の存在を暗示するナイフと器だけがテーブルに置かれている。建物は現在ではブランディワイン・

リヴァー美術館の管理となって、一部修復がなされて、大きくなりすぎた南側にあった松の木が伐採されたり、この内部も壁紙が張り直されたりしている。

6. 現在牛は飼われていないし木々も大きく育って母屋が見えづらいがカーナーズ・ヒルは今も変わらず見られる。
7. 現在ブランディワイン・リヴァー美術館の管理となり、美術館からミニツアーとして一般来館者も見られるようにされたことから、この水場も現在もバケツなどをワイエスが描いたのと同じように配置し、泉からの引き水も流されている。ワイエスの興味を誘ったのは引き水が立て続けるちょろちょろと小さくこだまする音が視覚を刺激したところにあった。
8. 明かりの灯る窓を強調するために現在は木の陰で見えなくなっている一部の窓は省略されている。
9. カールの妻アンナ・カーナーはドイツから夫とともに移民として来たが、アメリカでの生活になじめず晩年には精神に変調をきたしたといわれている。カールの肖像 (No.3.) ではカールはワイエスを見つめ返していたのとは対照的に、アンナはモデルとなっても視線を交わすことはしていないところに、彼女の内面を表現しているといってもよい。描かれた場所は母屋の2階で窓からため池とカーナーズ・ヒルが見える。現在ははがれかけた当時の壁紙が残っている。
10. 公道からカーナー農場への入口には現在も石の門柱が残されている。しかし、ワイエスが繰り返し描いた松並木は枯れたり、切られたりして当時のままではない。
11. カーナー家のポーチから雪に覆われたカーナーズ・ヒルを眺めるアンナを描いたこの作品では、丘が実際以上に^{そび}聳えているのが現場を見るとよくわかる。妻にとっても独善的であったカーナーを象徴しているようである。
12. カールが重い病気にかかった時、通いの看護婦として来ていたのがのちにワイエスの重要なモデルとなったヘルガ・テストーフである。ため池が見える2階の1室で横たわるヘルガを、明るい月の光が差し込む窓際で描いている。月の光の中では実際には窓の向こう側までは見られないと思われるが、堰き止めら

れた水面と流れ出る水が月の光の中でもハイライトとして描かれており、そこがワイエスが描こうとしたモデルの内面の象徴ともなっている。

13. 冬季のカーナー家母屋の玄関を描いた作品で、厳しいここでの生活を想像させる。現在は手前の木が大きく育っており、時の流れを感じさせる。
15. カーナズ・ヒルの頂上付近からカーナー農場を見下ろした景色である。現在の頂上には松の大木が残っている。ワイエスはカーナー家の建物を遠くに見下ろし、そこに住むドイツ生まれのカールと彼の生活や性格までも思い浮かべている。そしてその場には実際にはないが、以前妻ベッツィが買ってきて自宅の穀物倉に吊るしてあったカリブーの角と組み合わせることで、優れたハンターでもあったカールを象徴させることを意図している。こうしたところにも実景とワイエス自身が心の目で見ている情景とは必ずしも同一ではないことがわかる。
17. 「ブrintons・ミル」と呼ばれる粉ひき小屋は1958年に売りに出され、ワイエスの妻ベッツィが買い取って、大幅な改修工事を行って自分たちの住居とした。工事は1963年に完了したが、この作品では改修工事中の1962年の粉ひき小屋が表されている。鉛色の冬の空のもと、草が引がかかった有刺鉄線と葉を落とした木立越しに水車小屋とその右側の穀物倉が描き出されている。現在同じアングルで見ると継ぎ足された木造の母屋が見える。

この作品のなかには目立たないが2羽のキジバトがさりげなく描きこまれている。キジバトはクリスマスにちなんだ「積み上げ詩」として知られている『クリスマスの12日』にも歌われているようにキリスト教では重要なモチーフで、新約と旧約の二つの聖書を暗示しているとも言われている。また、映画『ホーム・アローン2』でも主人公の少年がクリスマス・ツリーに飾られていた2羽のキジバトの飾りをもらったり、人にあげたりするシーンが重要な意味をもっていたように、友情と愛のしるしともされていて、キリスト教を土台とする人々にとっては理解されやすいアイコンである。つまり、幼い頃からクリスマスやハロウィンなどの年中行事を家族で楽しんできたワイエスにとっては、当然の知識と想いがあり、それを家族との新しい生活場所となるこの建物の絵の中に描きこんだ意図が想像できるだろう。

24. 自宅の建物群を背景に第二次大戦に従軍経験のある知人を描いたこの作品の題名は《戦場》である。まさに自宅付近が独立戦争当時の戦場であったことを脳

裏に浮かべながら、雪の残る轍を時間を越えて戦車のもののように見立てて、この景色と人物を見ている。このように見られる位置はクリーク・ロードを挟んで高台に建つ事務所兼使用人の住まいあたりからである。

25. 自宅付近のなかでも粉ひき小屋は繰り返し描かれたワイエスお気に入りのモチーフである。水車を回すためにブランディワイン川から引かれた水路をまたいで建つ古い歴史を持つ粉ひき小屋が穏やかな流れの水面に鏡のように映り込んでいる。写真のように緑豊かな夏場とは異なり、冬の澄み切った空気までを描き出そうとしている。
28. 現在も自宅近くの水路のわきに立つ内側が洞^{うろ}になった古木がある。この洞の部分に裸婦を組み合わせて一度完成を見たが、後になって作家自身の手で裸婦が消されてしまった。今となってはその真意を確かめることが出来ないが興味深い作品である。
29. ワイエスの生家に付随する父N.C.のアトリエの裏手を描いたこの作品は、冬枯れたりんご畑が広がり、わずかな枯葉が風に舞い、その影が板壁に写っているところに画家の意識が注がれている。ワイエスの生家と父N.C.のアトリエは現在ブランディワイン・リヴァー美術館の管理下になって、美術館からのミニツアーで見に行くことができ、ボランティアガイドによる案内がつく。
30. 31. ワイエスがチャッツ・フォードでアトリエとして使っていた建物である。ブランディワイン・リヴァー美術館からは半マイルほど南に位置している。この家のドアにはいまでも「工作中ですので邪魔をしないでください。サインも致しません」と書いた表示が張られている。
32. 33. ワイエスがアトリエとして使っていた建物の南側の部屋には息子たちの主治医であったマーガレット・ハンディ医師から送られたという「カス」と呼ばれる大きな食器棚が現在も置かれている。この部屋はワイエスの息子で画家となったジェイミーもアトリエとして使うことができるようになっている。
34. 1942年に描かれたアメリカスズカケの大木は21世紀に入った現在も変わらず樹勢を誇っている。ワイエス夫妻は夏の期間はカナダ国境近くのメイン州にある夏の家で過ごすため、必然的にペンシルヴェニアを描く作品は冬の景色となる。葉を落とした木の複雑に伸びる枝ごしに緩やかな起伏を見せるペンシルヴェニ

ア、チャッツ・フォードの風景を写し取っている。独立戦争を記念した古戦場史跡のすぐ近くであって、石造りの民家もワイエスが描いた当時とさほど変わってはいない。写真では夏場で茂った葉で見通すことはできないが、斜面を下った向こうには今は交通量の多い国道1号線が通っている。

35. この場所はブランディワイン・リヴァー美術館からは西方向に1マイルほどのところで、カーナー家とは反対方向に位置している。現在国道1号線のすぐ脇に建つレンガ造りのこの家はワイエスが描いた当時と外観はさほど変わってはいない。しかし道路の拡張工事に伴って裏側の張り出していた部分がなくなっている。
37. リング・ロードと呼ばれるこの道はカーナー農場へ続いており、そのすぐ手前には黒人たちが集まったというマザー・アーチャー教会の礎石がわずかに残っている。同じ場所から描かれた1940年の《切通し》(No.36.)では教会の建物が描かれている。この下り坂を越えたところからその向こうにはカーナーズ・ヒルと呼ばれる大きな丘が広がっている。マザー・アーチャー教会に集まる黒人たちがワイエスの友人たちでもあったためか、このあたりをよく描いている。この道は南側からカーナー農場の脇を通過して父が事故死した踏切跡を越え、さらに国道1号線へと続いている。そこを越えるとワシントンらが戦った古戦場のブランディワイン・バトルフィールド州立公園である。
38. 39. 40. この場所は国道1号線沿いのブランディワイン・バトルフィールド州立公園近くにある友人宅の屋上階に備え付けられたサンルームである。現在もその友人夫妻はこの家に住んでおりワイエスの思い出を懐かしげに語っている。ワイエスはここでも自由に出入りを許されており、朝早く夫妻が眠っている寝室に忍び込んでベッドに眠る夫妻を描いたことさえあった。ワイエスはこのサンルームを大変気に入っており、夫人を座らせたり、部屋だけを描いたり、あるいはそこからイマジネーションを働かせて修道女の衣装を着た人物を描いたりした。
41. ワイエスは高齢になって腰骨を悪くし、手術後杖をついていた時期があった。カーナー農場近くを走るリング・ロード沿いに見た老木の枝がちょうど電柱を杖にして持っているように見えたことから、その姿に自分自身を投影してこの作品は生まれたという。残念ながらこの木は2014年に道路整備に伴って伐採されてしまった。

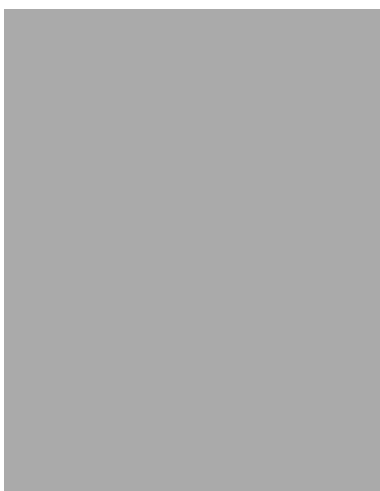
作品と現地写真（2014年9月筆者撮影）



1. 《Spring Landscape at Kuerner's》 1933 Oil on canvas, Private collection



2. 《Winter 1946》 1946 Tempera on panel, North Carolina Museum of Art



3. 《Karl》 1948 Tempera on panel, Private collection



4. 《Brown Swiss》 1957 Tempera on panel, Private collection



5. 《Groundhog Day》 1959 Tempera on panel, Philadelphia Museum of Art



6. 《Young Bull》 1960 Drybrush on paper, Private collection



7. 《Spring Fed》 1967 Tempera on panel, Private collection



8. 《Evening at Kuerners》 1970 Watercolor on paper, Private collection



9. 《Anna Kuerner》 1971 Tempera on panel, Private collection



10. 《Where the German Lives》1973 Watercolor on paper, Fukushima Prefectural Museum of Art



11. 《Easter Sunday》1975 Drybrush on paper, Private collection



12. 《Overflow》1978 Drybrush on paper, Private collection



13. 《Ice House》 1978 Watercolor on paper, Private collection



14. 《Tramp in the Barn》 1978 Watercolor on paper, Private collection



15. 《Rack at Kuerners》 1983 Watercolor on paper, Private collection



16. 《Working Farm》 1988 Watercolor on paper, Fukushima Prefectural Museum of Art



17. 《The Mill》 1962 Tempera on panel, Philadelphia Museum of Art



18. 《Marsh Hawk》 1964 Tempera on panel, Private collection



19. 《Muddeid up》 1966
Watercolor on paper,
Private collection



20. 《New Ice》 1968
Watercolor on paper,
Private collection

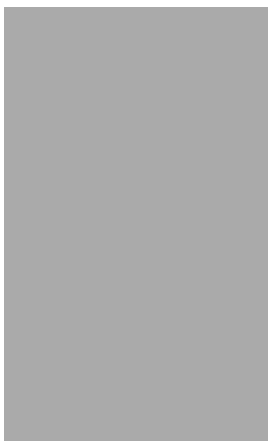


21. 《Cider Barrel》 1969 Watercolor on paper, Private collection



22. 《Mill in Winter》 1978 Drybrush on paper, Fukushima Prefectural Museum of Art

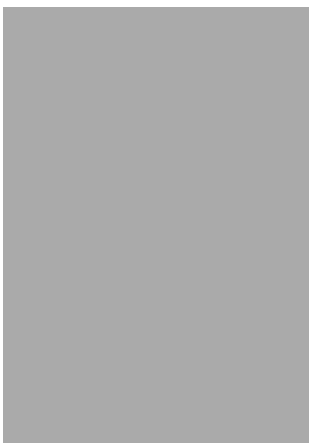




23. 《747》 1980 Tempera on panel, Andrew & Betsy Wyeth



24. 《Battleground》 1981 Tempera on panel, Nelson Atkins Museum of Art



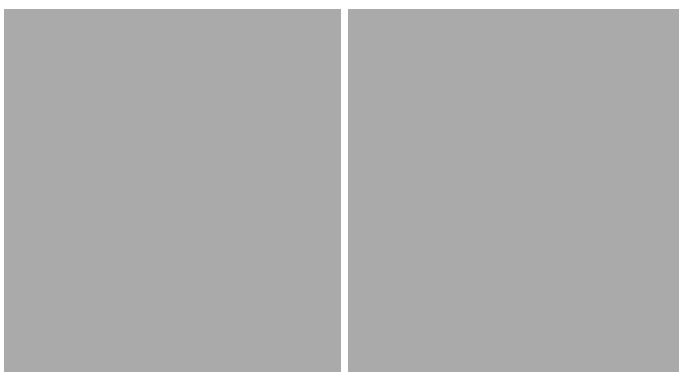
25. 《Flour Mill》 1985 Watercolor on paper, Private collection



26. 《Mill Pond》 1985 Watercolor on paper, Private collection



27. 《Crescent》 1987 Tempera on panel, Private collection



28. 《Dryad》 2000 Tempera on panel, Andrew & Betsy Wyeth



29. 《Blowing Leaves》 1980 Watercolor on paper, Private collection



30. 《My Studio》 1974 Watercolor on paper, Private collection



31. 《Open Shutter》 1974 Watercolor on paper, Andrew & Betsy Wyeth



32. 《The Kass》 1975 Watercolor on paper, Private collection



33. 《Barefoot》 1992 Watercolor on paper, Private collection



34. 《Pennsylvania Landscape》 1942 Tempera on panel, Brandywine River Museum



35. 《Tenant Farmer》 1961 Tempera on panel, Private collection



36. 《Road Cut》 1940 Tempera on panel,
Private collection



37. 《Ring Road》 1985 Tempera on panel,
Private collection

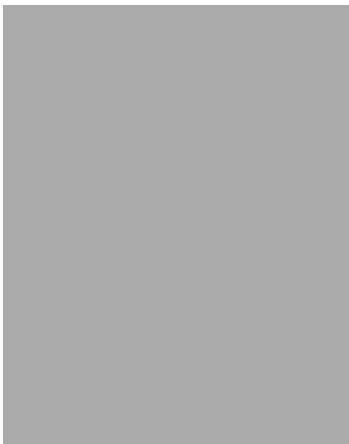


38. 《Glass House》 1991 Watercolor on paper, Private collection



39. 《Dovecote》 1992
Watercolor on paper,
Private collection

40. 《Renfield》 1999
Tempera on panel,
Andrew & Betsy Wyeth



41. 《Walking Stick》 2002 Watercolor on paper, Private collection

All works of art by Andrew Wyeth are reproduced permission, ©Andrew Wyeth
No.12: © Pacific Sun Trading Co.

作品リスト

No.	作品タイトル Title	制作年 Date	技法/材質 Medium/Material	所蔵先 Collection
1.	Spring Landscape at Kuerner's	1933	Oil on canvas	Private collection
2.	Winter 1946	1946	Tempera on panel	North Carolina Museum of Art
3.	Karl	1948	Tempera on panel	Private collection
4.	Brown Swiss	1957	Tempera on panel	Private collection
5.	Groundhog Day	1959	Tempera on panel	Philadelphia Museum of Art
6.	Young Bull	1960	Drybrush on paper	Private collection
7.	Spring Fed	1967	Tempera on panel	Private collection
8.	Evening at Kuerners	1970	Watercolor on paper	Private collection
9.	Anna Kuerner	1971	Tempera on panel	Private collection
10.	Where the German Lives	1973	Watercolor on paper	Fukushima Prefectural Museum of Art
11.	Easter Sunday	1975	Drybrush on paper	Private collection
12.	Overflow	1978	Drybrush on paper	Private collection
13.	Ice House	1978	Watercolor on paper	Private collection
14.	Tramp in the Barn	1978	Watercolor on paper	Private collection
15.	Rack at Kuerners	1983	Watercolor on paper	Private collection
16.	Working Farm	1988	Watercolor on paper	Fukushima Prefectural Museum of Art
17.	The Mill	1962	Tempera on panel	Philadelphia Museum of Art
18.	Marsh Hawk	1964	Tempera on panel	Private collection
19.	Muddeid up	1966	Watercolor on paper	Private collection
20.	New Ice	1968	Watercolor on paper	Private collection
21.	Cider Barrel	1969	Watercolor on paper	Private collection
22.	Mill in Winter	1978	Drybrush on paper	Fukushima Prefectural Museum of Art
23.	747	1980	Tempera on panel	Andrew & Betsy Wyeth
24.	Battleground	1981	Tempera on panel	Nelson Atkins Museum of Art
25.	Flour Mill	1985	Watercolor on paper	Private collection
26.	Mill Pond	1985	Watercolor on paper	Private collection
27.	Crescent	1987	Tempera on panel	Private collection
28.	Dryad	2000	Tempera on panel	Andrew & Betsy Wyeth
29.	Blowing Leaves	1980	Watercolor on paper	Private collection
30.	My Studio	1974	Watercolor on paper	Private collection
31.	Open Shutter	1974	Watercolor on paper	Andrew & Betsy Wyeth
32.	The Kass	1975	Watercolor on paper	Private collection
33.	Barefoot	1992	Watercolor on paper	Private collection
34.	Pennsylvania Landscape	1942	Tempera on panel	Brandywine River Museum
35.	Tenant Farmer	1961	Tempera on panel	Private collection
36.	Road Cut	1940	Tempera on panel	Private collection
37.	Ring Road	1985	Tempera on panel	Private collection
38.	Glass House	1991	Watercolor on paper	Private collection
39.	Dovecote	1992	Watercolor on paper	Private collection
40.	Renfield	1999	Tempera on panel	Andrew & Betsy Wyeth
41.	Walking Stick	2002	Watercolor on paper	Private collection